

芥川賞全集

—十四—

芥川
賞
集

江苏工业学院图书馆
藏书章

第十四卷

龍

文藝春秋

芥川賞全集 第十四卷

著者

米谷ふみ子
村田喜代子
池澤夏樹
三浦清宏
新井満
南木佳士
李良枝

一九八九年五月三十日 第一刷

発行者

豊田健次

発行所

株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話(〇三)二六五―二二一

本文印刷

理想社印刷所

付物印刷

凸版印刷

製本所

中島製本

製函所

加藤製函

万一、落丁乱丁の場合は

お取替え致します

Printed in Japan

ISBN4-16-507240-0

目次

過越しの祭

米谷ふみ子

5

鍋の中

村田喜代子

57

ステイル・ライフ

池澤夏樹

113

長男の出家

三浦清宏

153

尋ね人の時間

新井 満

215

ダイヤモンドダスト

南木佳士

285

由 熙 (ユヒ)

李 良枝

325

選 評

393

受賞者のことば

459

年 譜

465

題 裝

字 丁

中 粟

田 屋

功 充

芥川賞全集

第十四卷

過越しの祭

米谷ふみ子

(第九十四回 昭和六十年下半期)

「過越しの祭」(昭和六十年十月発行、昭和六十一年三月第八刷、新潮社刊)を底本とした。

『この月の十日におのおの、その父の家ごとに小羊を取らなければならぬ、すなわち、一族に小羊一頭を取らなければならぬ。もし家族が少なくて一頭の小羊を食べきれないときは、家のすぐ隣の人と共に、人数に従って一頭を取り、おのおの食べることに応じて、小羊を見計らわなければならぬ。……そしてこの月の十四日まで、これを守って置き、イスラエルの会衆はみな、夕暮にこれをはふり、その血を取り、小羊を食する家の入口の二つの柱と、かもしにそれを塗らなければならない。そしてその夜、その肉を火に焼いて食べ、種入れぬパンと苦菜を添えて食べなければならぬ。生でも、水で煮ても、食べてはならない。火に焼いて、その頭を足と内臓と共に食べなければならない。朝までそれを残しておいてはならない。朝まで残

るものは火で焼きつくさなければならない。あなたがたは、こうして、それを食べなければならない。すなわち腰を引きからげ、足にくつをはき、手につえを取って、急いでそれを食べなければならない。これは主の過越しである。その夜わたしはエジプトの国を巡って、エジプトの国における人と獣との、すべてのういごを打ち、またエジプトのすべての神々に審判を行うであらう。わたしは主である。その血はあなたがたのおる家々で、あなたがたのために、しるしとなり、わたしはその血を見て、あなたがたの所を過ぎ越すであらう。わたしがエジプトの国を撃つ時、災が臨んで、あなたがたを滅ぼすことはないであらう。

この日はあなたがたに記念となり、あなたがたは主の祭としてこれを守り、代々、永久の定めとしてこれを守らなければならない』

『モーゼが手を海の上にさし伸べたので、主は夜もすがら強い東風をもつて海を退かせ、海を陸地とされ、水は分れた。イスラエルの人々は海の中のかわいた地を行つたが、水は彼らの右と左に、かきとなった』

旧約聖書「出エジプト記」より

滑るように飛んでいたジャンボ747機は急に高度を落

とし始めた。

パート・レイノルズの演じている、どたばた喜劇の映画も終って、ようやく天井に明りが入った機内は、手洗いに立つ人や、水を呑みに行く人でざわついていた。

膝の上に堆く丸めた冬オーバーを五時間も抱え込んでゐるわたしを見て、夫のアルは眉間に皺を寄せた。

「もう四月にもなっているのに、そんなもの持って来たからだよ。ロスアンジェルスからずっと膝の上に。窮屈じゃないか。無用の長物だよ」

と咎めるように言う。

前席の客の荷物が多かったのと、アルが荷物を全部機内持ち込みにしたため、わたしのオーバーまで上の棚に入らなかったからであった。アルは荷物をチェック・インすると、あの受け取り所で永く待たされるからと、わたしと息子のジョンに小さいボストン・バッグやトーツ・バッグに物を詰めるようにと命じたのだった。

もうすぐニューヨークに着く。旋回し始めた。夫の言葉を耳にしながら、わたしはオーバーに付けていた鼻先を窓に向けた。外は灰色。煙？ いや、濃霧なのだ。どうも雲の中に突っ込んだらしい。なにか旋回の度数が多いようだ。眼をしばたきながら、わたしは窓外を眺めた。あらっ！

雨。霧が固りとなり、水滴となり、ひたひたと分厚いガラスを濡らし始めた。

永い間ロスアンジェルスに住んでいると、冬の雨期が終れば、あつからかと空が青く晴れ渡るので、雨のことを忘れてしまう。雨具の用意をして来なかった。八年の間にすっかりアンジェリノになってしまったのかしら。ニューヨークは四月末まで天候は決らないのだった。雪を割って出るクロカスの白、黄、紫の鮮やかな花々、弓なりの枝に、小さいレモンイエローの花を点々と猫柳のようにつけるれんぎょうが残雪の白に映えるのを除いては、五月になって初めてライラックが咲き、木々の若葉が蘇り、はなみずきの白やピンクが開き、地上にはチューリップだの、ヒヤシンスだのが一面に短期間に花を咲かすのだった。

何年振りの休暇なのだろう。わたしは濡れた窓ガラスを見ながら考えた。夫のアルと十四歳の息子ジョンと三人が一週間も泊りがけで旅行に行くなんて、我々の生活では考えられないことであった。今までの疲れが一週間でどうてい癒されれるとは思えないが、何年も何年もこういう日が来るのを怖れながらも待ち侘びて生活していたようだった。偶々、それを聞いたアルの友人が、父親が留守にしているイースト・サイドにあるアパートに滞在するよう取計って

くれたのだった。ブルーミングデール百貨店の近くと聞いてわたし達は心を弾ませた。ニューヨーク市としては比較的安全であり便利な場所であるからだ。

脳障害児ケンが生まれてから、わたし達は十三年の間、この子の世話に明け暮れていたと言っても過言ではない。或る施設に空席が出来て、ケンを入れた時、イースター・ホリデイがやって来て、ジョンの学校が休みに入った。素晴らしい解放感！あの十三年の糞尿の世話、不眠の夜、汚い食事時のテーブル、ケンの癇癪から解き放されたのだ。

彼を施設に入れてから家を出るまでは、全く体の中から精が抜けたように、足腰から力が抜けて、わたしはよたよたとしながら家事をしていた。それが、飛行機がニューヨークに近づくにつれて、ふつふつと泉が湧くように、胸から背にかけてエネルギーが充満して行くのを感じ、なんと薄情な親なんだろうと自分を責めもした。

ニューヨークでは何をしよう。今まで十四年間二人の赤ん坊の時から子供の世話ばかりに専念し、自分のことなど考える余裕もなかった。アリスに逢いたい。もう八年も逢っていないんだもの。彼女、もう幾つになったのかしら。三十五にはなっていると思う。未だハイジエニストをしているのかしら。広い聡明な額、その下の澄んだ棕色の眼、

ガンダーラの仏像のような端整な顔立ち。電話をかけるとその眼を輝かせて、「ミッチー、今何処なのっ」って叫ぶだろう。ジョンの幼稚園で初めて逢った人だった。ニューヨーク郊外のスカーパーローという所であった。日本人はおろか、東洋人なんてめったに逢わなかったあの頃、東洋人であれば何国人でも懐しく、「インドからいらしたの？」と尋ねたのだった。アリスは当惑した様子もなく、「皆そう尋ねるのよ。わたしはこの誰よりも純粹のアメリカ人かもしれないわ。わたしの中には白人と黒人とアメリカン・インディアンが同居しているの。わたしの生家に来てごらんささい、あらゆる色の人間がいるから」と初対面のわたしに優しく微笑んだのだった。「サリーを巻いて、眉間に赤い点を付けると、インド人と見間違えられそうよ」とわたしは言った。彼女はあの澄んだ棕色の大きな眼をつぶらにわたしに向けて、「ええ」とうなずき、その琥珀色の顔をほころばせた。アリスの息子のステイブは大きくなったろう。三歳だったジョンが自分で初めて作った友達であった。幼稚園から帰って来て、いつもステイブという男の子の話をしていたが、わたしは、その子に逢うまで、彼もジョンのように人種の混ざった子供であることを知らなかったのだで驚いた。

それから、バレリーナのようなイレエヌにも逢おう。ひつつめにした黒い髪と大きい瞳の彼女とは、わたし達が日本に住んでいた時知り合ったのだった。もう十六年も昔のこと。芦屋の駅の近くの生活協同組合の市場によく車で連れて行ってくれたものだった。日本でパッチワークなんてものも流行っていなかった頃、そんなスカートを彼女が穿いていると、ブルジョワ階級の芦屋夫人達が自分達の無知を棚にあげて、(やっと日本が継ぎ当てから解放された頃だったから)継ぎを当てたスカートだと思ったのか、後指を指して笑っているのを背後に聞き、嫌な思いをしたものだった。彼女はあの時の夫と別れたと聞いた。一人の男の子を抱えて何とかやるのだと。ニューヨークに住んでいた頃、よくマンハッタンで落ち合って一緒に食事に行ったことだった。わたしがアメリカ人の偏見を嘆くと、イレエヌはいつも自分のフランス人の母親のことを話した。母親の英語に、強いフランス語の訛があるので、百貨店で買物をすると売り達が、彼女の背に向かってあとから真似をするのだと。

彼女達と何処で逢おうかな。ランチを何処かでして美術館に一緒に行こう。積りに積った話がある。心が昂ぶるのを覚え、窓の外に目をやった。

外は吹き降り、雨脚が長く窓に当たって来る。

「ケネディ空港の滑走路が混んでおりますので、この機は三十分遅れて到着の予定でございます。尚、気流のため、少し揺れますので、シートベルトをお付けになって御着席願います」

というアナウンスがあった。途端に、機体がごとんと横揺れして下降した。それから、旋回し始めた。ケーブル・カーが階段で挟まれた坂を降りて行くように飛行機は、ごつごつと降りました。ニュージャージー州の上空、ロングアイランド、コネティカット州の上を飛んでいるのであろう。四界四面、白い煙が立ち籠めたような雲で覆われているかと思えば、横なぐりの雨で何も見えなくなってしまう。そして、次の瞬間には、左の方に灰色の波打った雲間を縫って金色の陽光が線状に放射している。機体の右側には、白や灰色の雨雲をバックに綺麗な半円の虹が出ていた。それは、恰も子供の絵本に描かれた背中に大きな白い二つの翼を付けたエンジェルとか、小さい巴の紋様の付いた沢山の太鼓を肩の上に担いだ雷様の住んでいるような世界であった。空港から飛び立って来た飛行機であろうか、遙か彼方に小さく銀色に光っているのが右の窓から見えた。体が宙に浮いたように持ち上げられた感じになる。飛行機は大き

な弧を描くように左回りに旋回した。心持ち体の右の方が上り気味になった。

今までジョンとひっきりなしに喋っていた夫が急に静かになった。この機内でも、ロスアンジェルス住民であることは一目瞭然としている、冬でも日焼けした角ばった顔が、じっと前を焦点もなく見ている。その褐色の肌の下の色が失せ始めた。もどかしそうに、前の座席の背についているポケットを、左手のすんなりとした指でまさぐって、航空会社の案内雑誌や昼食のメニューを取り出し、右手で、その後に入っていた白い紙袋を積み上げた。それから、立ったらいけないというアナウンスがあったにもかかわらず、シートベルトを外して、無言のままトイレに立つて行った。強風にうたれた雨が、窓に当る音がする。

パーサーのいやに落ち着いた機内放送が聞こえた。「ドクターいらいしゃいませんか。殊に、心臓専門のドクター。病人が出ましたので」

まさかアルではあるまい。胃に突然しこりが出来たように感じる。アルは右の冠動脈が一本完全に詰まっているので、心臓の薬を飲んでいいる。その上、心臓が痛むと、あの爆弾を作るニトログリセリンを飲むようにと、いつもポケットに入れて歩いているのである。飛行機が旋回したり、上昇

したりするだけで、心臓というものは影響を受けるのだろうか。考えている間もなく、機は上昇し、左に大きく旋回する。

「スチュワードを除いては、スチュワードスも皆席に着いて下さい」

飛行状態がよほど悪化しているに違いない。もうアルがトイレに立ってからの位経ったのだろう。気が気でなくなった。前を見、後を見る。今まで、声高く笑い喋っていた乗客も皆心配そうに一斉に前を見つめている。笑い声どころか話し声さえも聞こえない。聞こえるのは、ぱしっぱしと窓に打ちつける大粒の霰か雹の音のみ。右側の窓に、先刻飛んでいたのと同じ飛行機が見えた。あれも空港に着陸出来ないのだろうか。ぎぎーぎぎと機体が軋んだ。ざあっと雨の音。

折角楽しみにしていた休暇も雲行きがおかしくなり出した。

勿論、飛行機が墜ちるなら、どんな状態にしようとして変りはない。食事をした後であろうと、食べてなかるうと、立派なスーツを着ていようと、裸であろうと、夫が自分と一緒に座席に座っていようと、死んでしまえばそれまでである。死んだ後は、生きている人は新聞を見て、あの

人達は座席で抱き合つて死んだと思うに違いない。まさかアルがトイレで吐いていたとは思うまい。でも、墜ちるなら、休憩を楽しんで、疲れがとれて体がしゃんとしている時にして欲しい。死ぬまで疲れていたなんて往生際が悪いではないか。

「ダディどうしてるんだらう」

耳に当てていたイヤホーンをはずしながら、ジョンは大きい黒い眼を曇らせた。

「到着が三十分遅れます」が「一時間遅れます」ということになった。窓にバラバラと霰がはじけて、二、三白い小さい玉が窓の縁に溜つては消えて行く。機体が絶えず横揺れをする。胃が持ち上つて来るように感じ、気が沈んで来た。アルがああいう状態なので気の所為かもしれない。わたしは家を出る前、つまり、七時間前に、胃の消化を助ける三共胃腸薬を二錠飲んで来た。自動車の遠乗りでも、出かける前に必ずこれを飲むことにしている。それを見て、いつもアルとジョンが声を揃えて高らかにいう。

「頭痛にもサンキョウ、腹痛にもサンキョウ、胸やけにも、酔酔にも、万病の薬」

それが効いたのか、幸いにもそれ以上悪くはならなかった。

（あなた、三共飲めへんかったから罰当ったんやわ）

飛行機が下降し出した。アルがトイレから通路に出て来た。あの心臓の医者アルのためではなかったのだ。わたしは深々と座席に座り直した。飛行機が揺れる度に足がふらつくので、彼は両手で通路の左右の座席の背凭れに一つずつしっかりと手を掛けながら帰って来た。

「吐いたら気分が良くなった」

少し顔色が良くなったようであつた。蔦色の丸い眼が、精気が入つたように、きらりと光つた。真綿を引き延ばしたような、薄い少い栗色の髪を両手で撫でて、席に座り、夫はシートベルトを付けた。わたしは再び深く息を吸つてオーバーを両手で抱え込んだ。

歓喜と叫び声、拍手喝采して無事着陸を乗客は確かめ合つた。六時半。ケネディ空港から外に出た時は、頬に氷雨が当つて冷たいというより痛かった。暮色の中の空港の辺りは、雨でけぶり、常緑樹の黒い固りを除いては、針金細工のような木々の黒い枝が震えているようであつた。芝生も未だに白っぽく、春からほど遠い様相をしていたのにわたしはショックを受けた。パルムの樹が立ち並び、青々とした芝生に赤や白の花が咲いているロスアンジェルスに比

べて、なんという違いなんだろう。ニューヨーカーは、これを春の萌しと呼ぶのかもしれないが、南カリフォルニアの天候に慣れたわたしには、これは冬よりも寒かった。八年前にはこういう所に住んでいて、これが当然であったのを忘れてしまっていた自分にショックを受けた。わたしはそれでもオーバーを着てフードをかぶっているからよいが、アルとジョンは何も持っていない。ジョンは薄いウインド・ブレイカーをスウェーターの上に、アルは裏なしのレインコートである。夫が、タクシーを待っている間中震え上っているのを尻眼に、(それ御覧、大きな口を叩いてからに)とわたしはオーバーの中に肩をすぼめた。

ニューヨークからロスアンジェルズに移った理由は、冬が寒くてたまらなかったからであった。わたしは関西育ちなので、この湿った寒い冬の気温のことは決して忘れはしない。だが、空港に降りて外へ出た時、肌をさすこの寒さに愕然とした自分が、実際の肌の感じ方というものを忘却してしまっているのに驚いたのだった。男というものは洋の東西を問わず、温度のことを言うときと汗をかかわるとでもいわんばかりに全く無関心を装う。

わたしがオーバーを持って来たのは、温度と少しも関係のない理由も挿まっていた。ロスアンジェルズに引越す冬

に、*「グアバクロンビー・フィッチ」*と舌が回りかねる名のスポーツ店で、このフードのついたスキー用の特別に岩乗に出来た暖かいオーバーを当時としては相当な値段を払って買ったのだが、ロスアンジェルズの冬が暖かいので着る機会がなく、この度、一度でも役に立てようと機会到来とばかり押し入れの奥から引っぱり出して来たのだった。

目的地に着くまでに分解してしまわないかと思うほど、古い汚いタクシーに三人は乗り、湿ったざらざらとしたニューヨーク市の空気を吸った。もう、とつぷりと日は暮れてしまつて、ネオンサインの赤、黄色、青の光が、雨滴に曲折して霞み、漆黒の空に反射して点滅している。ロスアンジェルズのフリーウェイに比べて幅の狭いパークウェイに数多くの大きなアメリカ製の古い無骨な車が道いっぱいに走る。トライ・ボロー・ブリッジを渡ると、クイーンズ・ボローからマンハッタンに入る。急に黒い高い建物が上から威圧し始めた。雨脚がヘッド・ライトに照らされて、白糸が織機で踊っているようだ。何もかも扁平で、市街地図のように出来たロスアンジェルズ、上を向かなくても、空はずっと眼前に展がっている。それが、このニューヨークの空は、高い建物間にちよこつと、建物の間に走って

いる道路と同じ形をしているのだから。わたしは、今更ながら、同じアメリカの中で、これだけでも違った二つの都市が存在しているのに驚くばかりであった。雨期の二、三カ月を除けば、底抜けに明るい眩しいロスアンジェルス。落ち着いているといえはいいえるが、ともすれば暗くなりがちな北の光線のニューヨーク。飛行機がなくて、あの不便なアメリカの鉄道にだけ頼っておれば、この莫大な距離のため、人の交流が迅速でなく、百年後には全く違う人種が、社会が出来上って、お互いに意志も疎通しなくなるのではないだろうか。

友人の父親のアパートは三番街の五十七丁目にあった。七時を過ぎてゐる。広いロビーに煌々と大きなシャンデリヤが輝いたイースト・サイドの豪華なアパートで、茶色のユニフォームを仰々しくつけた守衛が、うるさいほど身元を問ひ質し、控えや伝言と照らし合わせ、やっと鍵を呉れたのだった。犯罪の多いニューヨーク市で安全性を保証するにはこうしなくてはならないのだろう。二つの鍵を上への鍵穴や下の鍵穴に突っ込んでやっとアルが開いたドアからは、掃除婦の使ったバイン・ソルの掃除液のにおいが鼻をついた。一ヵ月ほど誰も住んでいなかったのだろう。

アルがドアの内側の壁についていたスイッチをオンにした。フォイヤーに明りが入った。スチームがむうつとして、乾いた空気が、今まで外の雨で湿っていた顔の皮をひんめくって行く。どうしてこうも、むやみやたらに暑くしなればならないのだろうか、この石油不足の折に、と一人託ちながらオーバーを脱ぎ、フォイヤーの左にあった押し入れを開けて、それを掛けた。

ジョンとアルは荷物を入口のフォイヤーの床の真中に置き去りにして、手当り次第に電気をつけ、ベッド・ルームが何処か、トイレはと、ドアを開け回っている。フォイヤーの右に小さいキッチンがあった。そして、その左に広々としたリビング・ルームがあり、続いて小さいシャンデリヤのある食堂がキッチンに隣り合っていた。それを挟んで二つの大きなベッド・ルームが別々に分れてついで、その横に、それぞれのバス・ルームが備わっていると機械的に間取りされたアパートであった。しうい赤塗りの中国人や山水の絵を描いた東洋風な飾り棚や、黒檀のコーヒーマー・テーブルがリビング・ルームに井然と置いてあった。アメリカ人や、ヨーロッパ人は、リビング・ルームに所狭しと物を置くのが好きで、いつもそれに辟易していたが、この瀟洒に飾られたスペースのゆつたりとしたリビング・